

危機に備える

東日本大震災そして福島第一原子力発電所（1F）事故からはや9年が経ちました。浜通りを中心に未だ多くの方々が避難先での生活を余儀なくされていることを思い、安全かつ着実に1Fの廃炉を進めること、原子力システムが二度とこのような事故を起こさぬよう更なる安全性向上に不断の努力を続けることが、原子力技術者・研究者の使命であると改めて心に刻んでいます。

水化学部会は、水化学ロードマップと水化学ハンドブック、2つの主要刊行物の改訂を同時期に進めたこともあって、忙しく活動をしておりました。編集と執筆を担われたあるいは現在担っておられる部会員の皆さまに感謝申し上げます。水化学ロードマップは、前回2009年版から十余年ぶりの改訂であることのみならず、2011年の福島第一原子力発電所事故を経て原子力発電における水化学技術の役割を根本から問い直した結果、大幅な改訂となりました。新たに章を設けて深層防護の観点から水化学技術の役割について考察を深め、また、核分裂生成物の挙動や汚染水処理など、過酷事故のレベルにおいても水化学が果たす役割は大きいことから、やはり章を新設して事故時対応の水化学を記述しました。改訂作業の過程で、原子力安全、材料、核燃料など、関連する他分野の専門家と意見を交わし、議論を重ねました。これは、コミュニケーション・ツールとしてのロードマップの意義を再認識する機会ともなりました。今は原子力技術にとってこれまでにない苦難の時期かもしれませんが、その中で水化学ロードマップを改訂したことによって、視野が開けたように思います。

ところで、全世界規模で新型コロナウイルスの感染とそれによる被害が拡大しています。現時点（3月17日）での状況を見る限りでは、各国と比べて日本は死者が少ないようです。識者の論説によれば、日本の医療技術や医療インフラが優れているということだけでなく、健康保険制度（国民皆保険）が効果を挙げているからだと言われています。この場合の分析が正しいか否か私には判断が付きませんが、一般論としてこのような『備え』は、平時には気付きにくく、非常時にありがたみを感じるもののようです。水化学も、平時には粛々とプラントパフォーマンスを支え、非常時には事故拡大抑止の鍵となる技術です。水化学部会としては、水化学技術の高度化と体制の整備を着実に進める一助になりたいと思います。